歴史よもやま話　その 24.

戊午の密勅

勅諚が出された安政 5 年（1858 年）が陰陽五行における干支の戊午（ぼご）に当ることから「戊午の密勅」といわれる。通常は朝廷→幕府→大名というルートで出される勅諚が、幕府に内密に朝廷から水戸藩に直接下され、写しを各大名に配布するよう求められたので、「密勅」という。

徳川幕府が朝廷の承諾を得ないまま日米修好通商条約を締結したことに、孝明天皇はお怒りになり、幕府に説明を求めたが返答が得られず、朝議は水戸藩に直接勅諚を出した。内容は次ぎの三点である。

＊ 勅許なく日米修好通商条約に調印したことへの啊責と、詳細な説明の要求。

＊ 御三家および諸藩は幕府に協力して公武合体の実を成し、幕府は攘夷推進の幕政改革を遂行せよ。

＊ 上記 2 つの内容を水戸藩から諸藩に廻達せよ。

幕府には、対立を意図するものでなく協力して対外政策に当るようとの添書付きで、禁裏付・大久保一翁を通じて伝えられたが、江戸より水戸に先着するよう図っての密勅であった。

密勅は水戸藩から御三家、御三卿に回送されたが、諸藩には幕命により秘匿された。水戸藩では、この密勅の処理を巡って、尊皇攘夷を標榜する改革派（激派）と、幕府との関係を重視する門閥派（諸生党）が激しく対立した。

井伊直弼を首班とする幕府は密勅を幕府に引渡すか又は朝廷に返納することを要求したが、水戸藩では藩論沸騰し膠着状態となって対応できず。幕府は、将軍継嗣問題でも対立していた水戸藩についてこの密勅が水戸藩の謀略であるとし、これに係わった者として家老・安嶋帯刀を切腹、京都留守居役・鵜飼吉左衛門斬首などの他、前藩主・徳川斉昭を水戸に永蟄居処分にした。水戸藩論は密勅返納に傾き、追詰められた反対派は、勅諚返納を阻止するため水戸街道を封鎖すべく長岡に屯集した。しかし長岡屯集は水戸藩上層部の工作によって懐柔され解散に向ったが、金子孫次郎ら主要人物の一部が江戸に潜伏した。さらに水戸にいた関鉄之介ら返納反対派の一部も江戸に潜入、品川宿に参集した後 3 月 3 日、桜田門外に登城中の井伊直弼を襲撃、暗殺した。

戊午の密勅が**桜田門外の変**に**直接結びついた**かどうかは断定できないが、勅諚の返納を巡って水戸藩内の対立を激化せしめ、一方井伊直弼・幕府が水戸藩の重役達を処刑、徳川斉昭を永蟄居処分して**安政の大獄**を加速させたことが大きな要因となったことは否めない。

凋落を始めた徳川幕府がアメリカの脅しに屈した**不平等条約**が、後世の日本にどのような影響を及ぼしたかの評価はさておいて、孝明天皇の不快感から生まれた戊午の密勅が、これを推進した井伊直弼自身の死に結びついたことは歴史の皮肉だろうか。